

ダンスとみやざき

—西米良村放課後子ども教室「未来ダンス」—

高橋るみ子（宮崎大学教育文化学部）

1 はじめに

地域に根ざしたダンスのあり方を探る研究（高橋ら舞踊学研究室の「みやざき学」）の一環として、今年度は、西米良村で、「未来ダンス」（西米良村放課後子ども教室「スマイル！にしめら」のプログラム）に取り組んだ。本稿では、実施に至るまでの経緯と、学生たちが中心となって実践した活動内容（9月17日から2月25日までの全19回）について報告する。

2 西米良「未来ダンス」の経緯

平成22年5月、宮崎県障がい者スポーツ大会における古川信夫氏（現西米良村教育長）と宮崎大学教育文化学部の学生との出会いが、「未来ダンス」の発端である。それから2ヶ月後の7月、舞踊学研究室を訪れた古川教育長から、開会式で健民体操の師範をする学生の姿に感心した、その学生たちに放課後子ども教室「スマイル！にしめら」（後述）の支援・協力をお願いしたい、早急に実施の可能性を探ってほしい、と依頼された。

古川教育長は、平成22年3月まで宮崎市立宮崎南小学校の校長職にあり、西米良村でのへき地教育の経験を持つ。古川氏は、宮崎市の子どもたちと西米良村の子どもたちとの違いを、次のように説明した。

山間へき地の西米良村には、中学校を卒業すると村外で就学するため、高校生、大学生の年代はいない。また、限られた人間関係の中での生活を余儀なくされている。一方、次代を担う青少年には、自立した一人の人間として力強く生きていくための「人間力」が求められている。中でも村の子どもたちには、社会・対人間関係要素であるコミュニケーションスキルや他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高めあう力が必要だと感じている。



Photo by 小河孝浩

そこで、舞踊学研究室は、古川教育長の「大学生に来村してもらい、子どもたちとふれあう中

で、運動、遊ぶ楽しさを味わわせるとともに人間関係を育んで欲しい」という願いを、学生（初等教育コース4年生等）に伝え、有志を募り、試行的にプログラムをスタートさせた。昨年9月のことである。

3 西米良「未来ダンス」の活動づくり

3-1 西米良村の子どもたち

放課後子ども教室の会場となった村立村所小学校（へき地）は、村役場の裏の急坂を上り切った高台に位置する、村内でただ一つの小学校である（表1参照）。宮崎大学からは、高速道を利用しても片道2時間を要する。

「未来ダンス」の活動づくりに必要な子どもたちの手がかりを、2001年に東京から帰郷し、宮崎の人や風景を撮り続けている写真家小河孝浩氏の「西米良写真日記おかえり」に探った。表2及び表3に示す。

表1 西米良村立村所小学校(平成22年度)

児童数	男	女	計	学級数
1年生	6	5	11	1
2年生	7	4	11	1
3年生	6	2	8	1
4年生	2	10	12	1
5年生	5	3	8	1
6年生	3	8	11	1
合計	29	32	61	6

(出典：平成22年度宮崎県教職員録)

表2 西米良写真日記「おかえり」に見る子どもたちの実態

- ・ 親も子もおじいちゃんもおばあちゃんも皆顔なじみ。普段は寂しい村所幡神社の境内に、子どもたちの元気な声が響き渡った。
- ・ 西米良の小学生の中には往復6キロの道のりを登校する子どももいて、走ることを楽しみにしているようだ。
- ・ 車が近づくとくると向きを変え深々と頭を下げてあいさつをする。
- ・ 西米良中学校の通学路では、伝統の一礼あいさつを全校生徒が実行する。車の運転手さんに向き直って頭を下げる姿は新鮮だ。
- ・ 村の運転手さんはどこの家の子もかを全員おぼえていてくれるので安心だ。
- ・ 西米良には高校がない。子どもたちは15歳の春から親許を離れての生活が始まる。独立心旺盛な子も、甘えん坊も、いや応なしに別れがやってくる。
- ・ 西米良の先生方はへき地教育に携わる教員として3年間を一区切りに赴任される。今日はその3年間を終えた先生方が次の赴任地へ向かう日だ。生徒たちは引越しを手伝い、送られる先生は教え子、保護者に丁寧にあいさつをして再開を約束する。4月からまた新しい出会いと縁が広がっていく。

表3 西米良写真日記「おかえり」に見る子どもたちと神楽のかかわり

- ・ 舞手の他に指導役の先輩、笛太鼓、見学の小学生たちが稽古を見守っている。見学にきていた小学2年生の子どもが、「スッカカン」と呼ばれる小型のシンバルで調子を取り始めた。

見ていた母親が「米良ん子は腹の中に入っとるうちから神楽を聞いているからねえ」とうれしそうに言った。

- ・ 過疎化は進むばかりだが、当時子どもだった人々が舞手の中心になり、神楽の保存に懸命だ
- ・ 村の中心地である村所地区は社人も多く、長老から小学生まで幅広い舞手が登場する。

3-2 放課後子ども教室「スマイル！にしめら」について

放課後子ども教室は、子どもたちに安心・安全に放課後を過ごせる場所を提供し、学年を越えた交流や、授業ではなかなか体験することのできない活動を外部指導者がサポートするものである。実施回数は、平成 22 年度は週 3 回（「未来ダンス」が始まる前は週 2 回）、授業が終わってからの約 2 時間（帰宅に利用する村営バスがやってくるまで）の活動となっている。ただし、授業時間の関係で、中学年と高学年は活動の途中から参加する。用意されているプログラムは、「未来ダンス」（金曜日）の他に、月曜日の「すくすくスクール」と水曜日の「FUN☆スポーツ」の 2 つがある。村外者（宮崎大学教育文化学部学生）が指導する「未来ダンス」以外の指導者は、村内の住民で、地域婦人連絡協議会、村語り部の会、スポーツインストラクター等である³。

3-3 「未来ダンス」の実際

3-3-1 「未来ダンス」の概要（図 1 参照）

3-3-2 「未来ダンス」の目的

西米良教育委員会の目的は、前章「未来ダンス」の経緯で述べた。それに合わせて、学生（おどスポ先生）の目的を、山間へき地の子どもたちと、そこで行われている地域教育について知ること、立ち止まって考える体験（ダンス）を通して子どもと自身とで表現の世界を拓くこと、とした。同じく、西米良教育委員会の目的に合わせて、舞踊学研究室の目的を、「スッカカン」を調子よく演奏すること以外にも、“お腹にいる時から神楽を聞いている米良ん子”が得意なこととはあるのか、あるとしたらそれは何かを、米良ん子の身体表現から明らかにすること、とした。

非公開

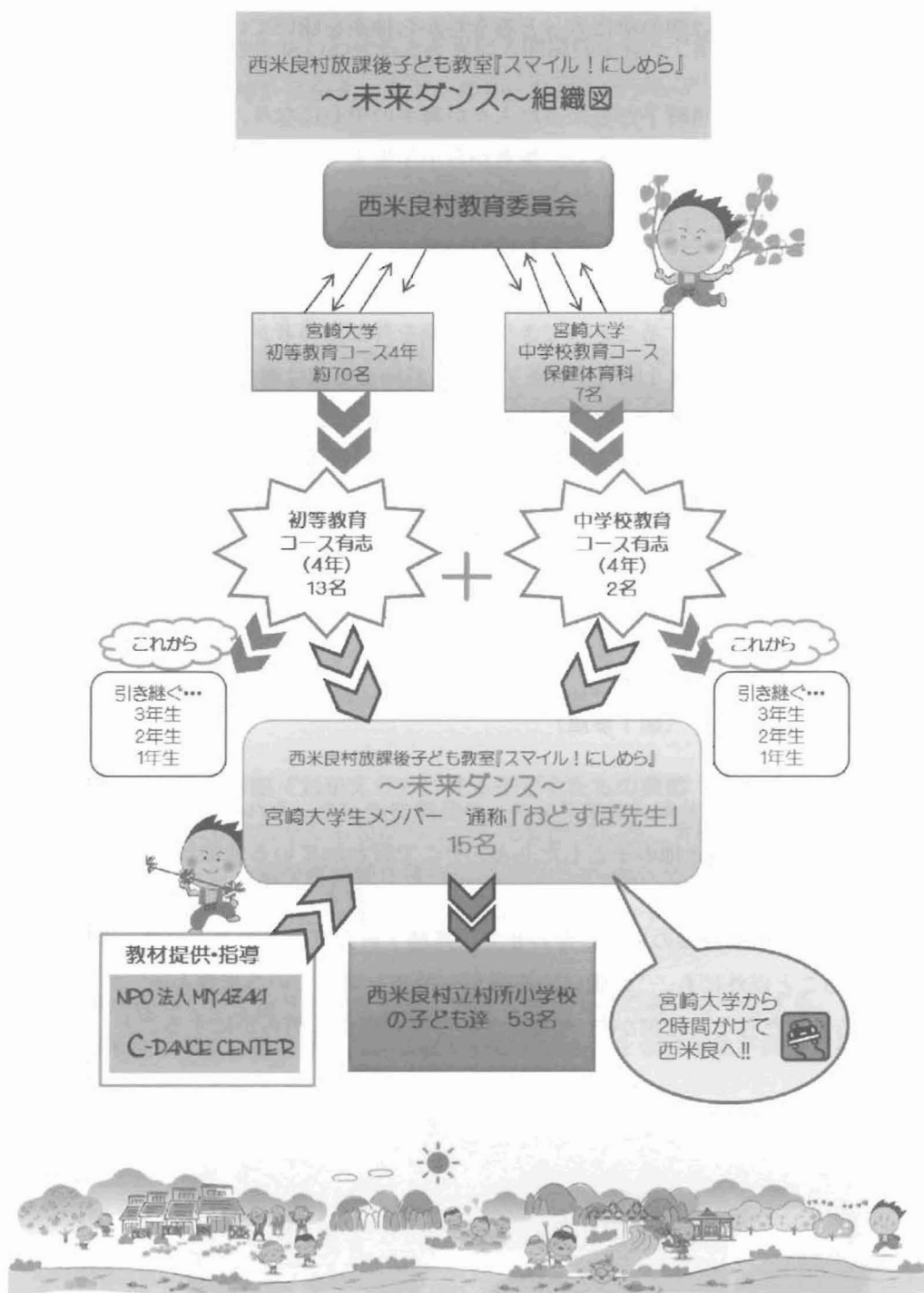


図 1 「未来ダンス」の経緯と組織 (作図：宗 2011)

3-3-3 プログラムのコンテンツ

実施した教材は 31 である(表 4 参照). その内訳は, 舞踊学研究室と NPO 法人 MIYAZAKI C-DANCE CENTER (以下, 「アート NPO」と言う.) が開発・提供した教材が 25, 活動の中で学生(おどス

ポ先生)が提供した教材が6(表4の教材番号が斜体のもの)である。また実施した31の教材は、「創作系」の教材が9(赤字)、「リズム系」の教材が6(青字)、「体づくり系」の教材が16(黒字)である。さらに「体づくり系」の教材は、体力を高める運動教材3と、多様な動きをつくる運動教材13で構成した。

表4 教材と実施回数

教材	教材名	初回	回数	順位	教材	教材名	初回	回数	順位
1	新聞紙で遊ぼう	1回	6	6	17	どこ切る兄弟・どこ切る姉妹	7回	4	9
2	いつもここからジャンプ・ジャンプ	"	12	4	18	8to1	8回	3	
3	以心伝心	"	16	1	19	少年ジャンプの時代	"	1	
4	M-KID'S エクササイズ	"	5	7	20	ドコノキノコ	9回	9	5
5	輪ゴムハードル	2回	4	9	21	足跡をたどって	10回	1	
6	蜘蛛の巣	"	3		22	にやにゆによジャンケン	11回	2	
7	カウントストレッチ	"	16	1	23	チキチキパンパン	12回	1	
8	土星ダンス	"	15	3	24	目隠し探検	"	1	
9	人間っていいな	4回	5	7	25	風になりたい	13回	1	
10	走って止まって	"	1		26	てっぱんダンス	14回	1	
11	新聞紙になって	"	1		27	「未来ダンス」人文字づくり	16回	1	
12	美しき青きドナウ	"	1		28	2人でストレッチ	"	1	
13	変身するぞ～忍者	5回	1		29	多様な動き	"	2	
14	猛獣狩りに行こうよ!	6回	1		30	暑い国から来たスパイ	17回	1	
15	人形使い	"	1		31	カくらべあそび	18回	1	
16	リレー大会	7回	2						

前述の分類から、「未来ダンス」の活動を概観した。

5回以上実施した教材は8で、その内訳は、「リズム系」の教材4と「体づくり系」の教材4である。5回以上の教材に「創作系」はない。逆に1回のみ実施した教材は16(52%)で、その内訳は、「表現系」の教材が8、「体づくり系」の教材が6、「リズム系」の教材が2である。

4 プログラムの成果

4-1 参加児童数

参加を希望した児童は53人(全校児童の87%)であった。しかし、実際に活動に参加した児童は33人で、20人は何らかの理由で参加していない。参加児童の“のべ数”は398人(19回を除く)であり、のべ数の内訳は、男子151人(37.9%)、女子247人(62.1%)である。

毎回の参加者数を図2に示した。

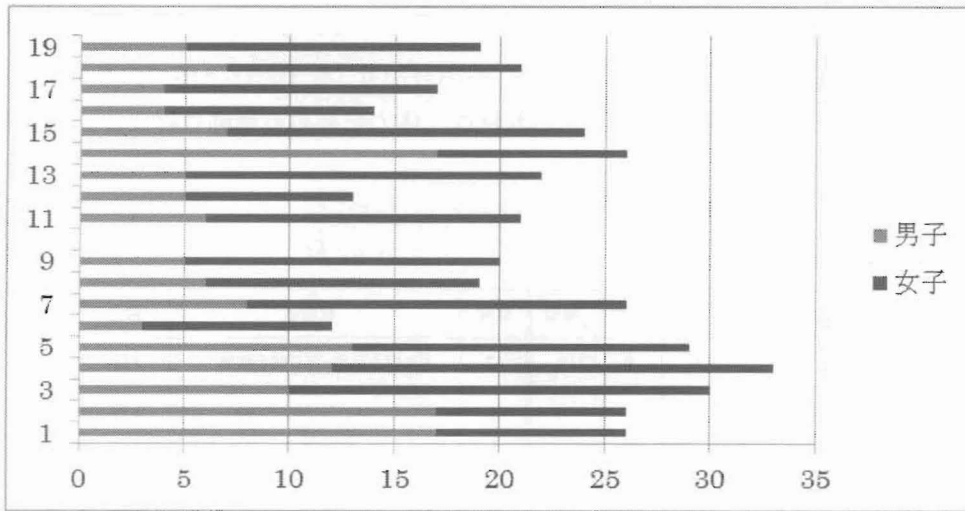


図2 実施回ごとの参加児童数の変化 (作図：高橋 2011)

図2から明らかなように、回ごとの参加児童数は、第4回(10月8日)の33人(男子17人、女子16人)が最多で、最少は第6回(10月22日)の12人(男子3人、女子9人)である。18回の参加児童数の平均は22人である。ただし、参加児童数が最少の10月22日は午前授業であり、同じく参加児童数が13人と少なかった第11回(11月26日)は、1～3年生のみの参加であった。

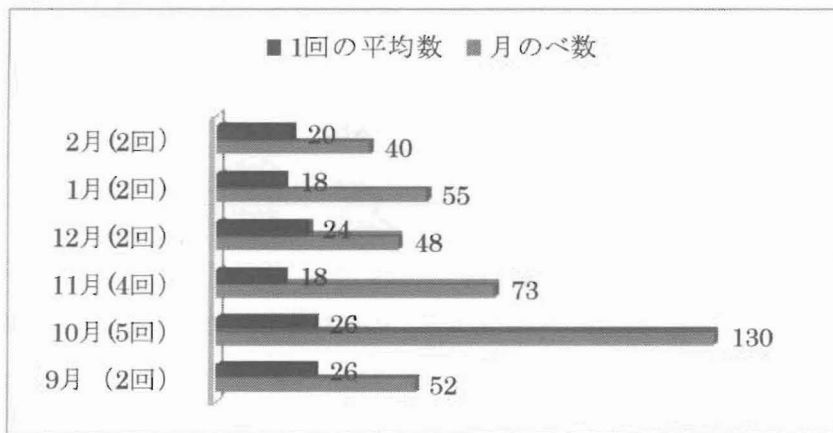


図3 参加者数の月別変化 (作図：高橋 2011)

図3から明らかなように、10月をピークに、徐々に参加児童数が減少している。その要因として、次回の活動の予告ができなかったことが考えられる。活動の予告がなければ、児童は次回の活動の見直しを持たず、活動に対するモチベーションも高まらない。同じく図3からは、他の月に比べると、11月と1月の平均参加児童数が低かったことがわかる。「11月に入り宮崎県特有の“秋あったけ?”状態に突入しました。」と11月5日(第8回)の活動記録にあるように、

宮崎に比べると山間部に位置する西米良村の冬の到来は早い。同じく11月26日（第11回）の活動記録にも、「もうすぐ12月になることもあり、西米良に吹く風も一層寒くなってきました」とある。事前に寒さに対する対策をとっていれば、寒さが厳しい期間も、多数の児童が参加する場を提供することができたと思われる。活動の予告と共に次年度の課題としたい。

4-2 学生（おどスポ先生）の参加数

「おどスポ先生」の募集に手を挙げた学生は15人（男子9人、女子6人）であった。参加児童数を考えると1回の活動には少なくとも3人のおどスポ先生が必要となる。そこで、学生らは、5人ずつの3グループ（A・B・C）に分れ、各グループが等分に5回ずつ担当する実施計画表を作成した。また、一人3回の参加をノルマとした。さらにグループごとにリーダー（世話役）を決め、リーダー間で参加・不参加の調整をすることにした。しかし、実際は、ノルマの3回を果たした学生は9人であった。ノルマを果たせなかった6人の内訳は、1回も参加できなかった学生が3人、1回しか参加できなかった学生が3人である。その内の5人が女子で、男子との活動やノルマに対する意識の違い（低さ）が顕著となった。これまでの経験から、4年生のこの時期の多忙さに男女の違いがあるとは考え難い。それぞれに事情があるとしても、この6人の参加状況が、他の学生の負担増（ノルマの3倍の10回以上の参加を余儀なくされた学生が3人）につながったことは確かである。

学生（おどスポ先生）の参加状況を図4に示す。（ABCはグループ名、丸数字は女子学生）

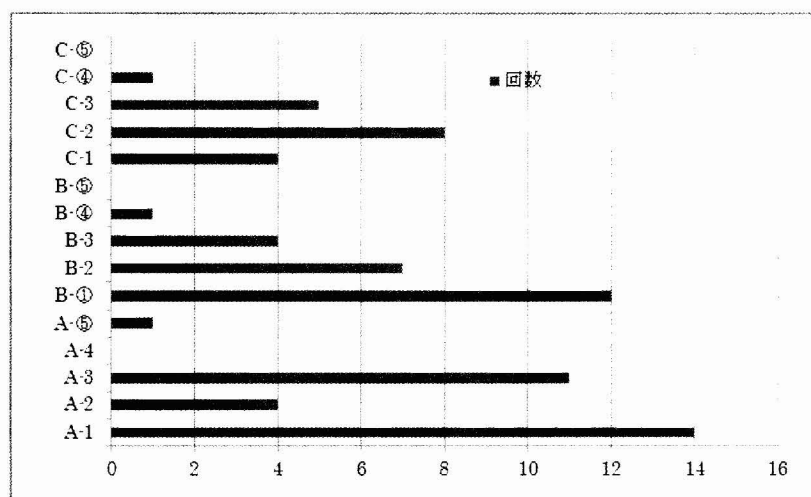


図4 学生の参加状況（作図：高橋 2011）

回ごとのおどスポ先生の参加状況は、最多が7人（第2回）で、最少が2人（第16回）である。3人に満たない回は、アートNPOがアーティストを派遣したり、活動に興味・関心をもつ3年生を誘ったり等で対応した。結果的に1度も参加しなかった学生に対して、事前に西米良村

教育委員会は往復も含めた保険をかけている。社会的な責任を果たすという意味で、不参加の学生の存在は、積極的に参加した学生にとっての反面教師であったと言える。

4-3 おどスポ先生の感想

活動記録の特記事項から、2時間の活動の特記としてふさわしい事項を抽出し、表5に示した。

非公開

表 5

-
- (第2回) 子どもたちはグラウンドいっぱい走りまわって元気よくダンスを踊っていました。
- (第3回) 子どもたちの高い身体能力に驚かされてばかりです。
- (第4回) ダンスが笑顔をつくり、その笑顔がさらにダンスを楽しくする、そんな未来ダンスになるようにしたいです。
- (第5回) 子どもたちがいろいろなものに変身する姿は大変楽しそうで、また子どもたちの目が輝いていました。今までの活動に少し変化を取り入れました。このことにより、さらに子どもたちの興味・関心・意欲を高めていくことができると感じました。
- (第6回) 基本的な動きを演示するだけで、子どもたちはどんどんと個性的な動きを創造していきます。
- (第8回) 子どもたちは多様な動きをたくさん僕たちに見せてくれます。それらの動きを十分にほめ、認め、彼らの表現力や創造性がさらに発展することができるようにサポートしていきたいです。
- (第9回) 子どもたちとおどスポ先生とが名前呼び合う場面も増えてきました。子どもたちは自分のお気に入りのダンスを「やろうよ、やろうよ」とせがむようになり、我々も日を増すごとにやりがいを感じています。
- (第12回) 子どもたちは本当に風になったかのようにビュンビュンとおどスポ先生を抜いていきます。
- (第13回) 近年、子どもたちの運動能力低下が叫ばれている中、西米良の子どもたちはそのような問題とは無縁であると思われるほど、積極的に体を動かす。
- (第15回) ダンスの際に、自分なりのアレンジもたくさん見られ、ダンスを楽しんでいる様子が伝わります。

(第16回)今日はアートNPOの野邊さんに来ていただき新しい動きをたくさん教えていただき、子どもたちはいつもと違う動きに、興味を示してとっても生き生きと活動していました。

4-4 参加児童による活動評価

「未来ダンス」の成果を知るために、最終回（2月25日）に、子どもたちにアンケート調査を行った。回答者は18人（3年生を除く）である。質問項目は以下の6項目とした。

- Q1 毎週ダンスは楽しみでしたか？
- Q2 未来ダンスは1ヶ月に何回あってほしいですか？
- Q3 大学生が来るのは楽しみでしたか？
- Q4 放課後だけではなく、1日中、大学生と活動してみたいと思いますか？
- Q5 活動の中で何が楽しかったですか？
- Q6 放課後子ども教室で取り上げて欲しい教科はありますか？

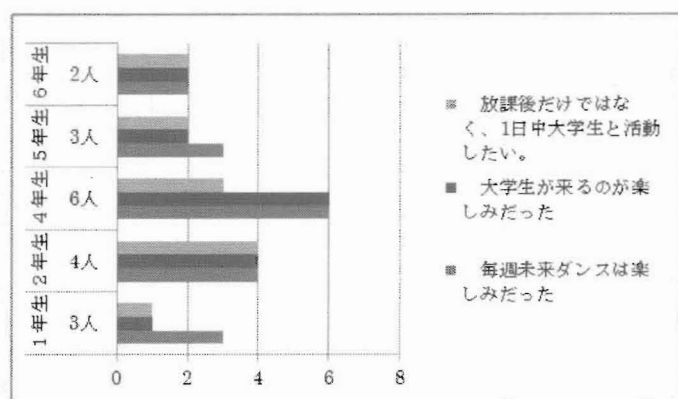


図5 アンケート調査の結果 (作図：高橋 2011)

Q1については、全員が、毎週の「未来ダンス」が楽しみだったと回答した。Q3については、「ハイ」を選択した児童が15人で、「イエ」が2人であった。1人は、わざわざ「ふつう」と書きいれて○を付けていた。Q4については、「ハイ」を選択した児童が15人で、3人は「イエ」を選択した。「イエ」を選択した3人の内の2人が1年生であった。毎回一番楽しそうに活動していた1年生であり、メンバーにとって意外な回答であった。

Q2については、高橋らの予想に反し、12人が、1ヶ月に4回以上を選択した(図6参照)。ただしアンケートに回答した児童は最後の回に参加した児童である。全参加者が回答した場合は、違った結果になったであろう。回答数が少ない中での結果であることを踏まえつつ、少なくとも4回あるいは4回以上の実施を希望する児童が2割はいるという実態を忘れずに、次年度の実施計画を考えていきたい。

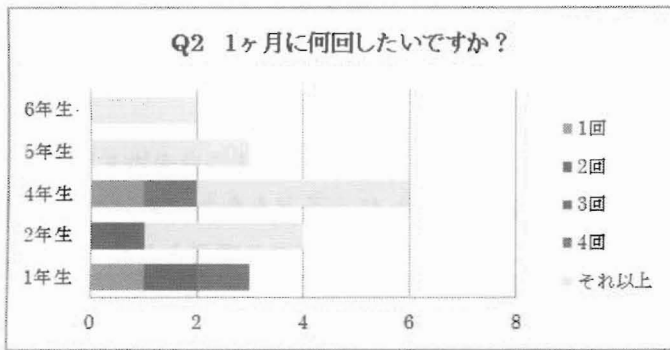


図6 アンケート調査の結果 (作図: 高橋 2011)

Q5 の回答を図7に示した。

「楽しかった」教材は、取り扱った回数が多いもの（「以心伝心」や「土星ダンス」、「ドコノコキノコ」）と、反対に取り扱った回数が1回のもの（「チキチキバンバン」や「少年ジャンプ」「変身するぞ〜忍者」）とに分かれる。特に後者は、高橋とアートNPOが共同開発した「気がつきゃほらダンスシリーズ」のコンテンツであり、他の企画の際にも子どもたちに人気のある教材である。もし、後者の教材を第5回以降に取り上げずに、初回から取り扱うようにしていたら、参加児童数は今より多くなったのではないだろうか。効果的な教材の出し方についても、今後の課題としたい。

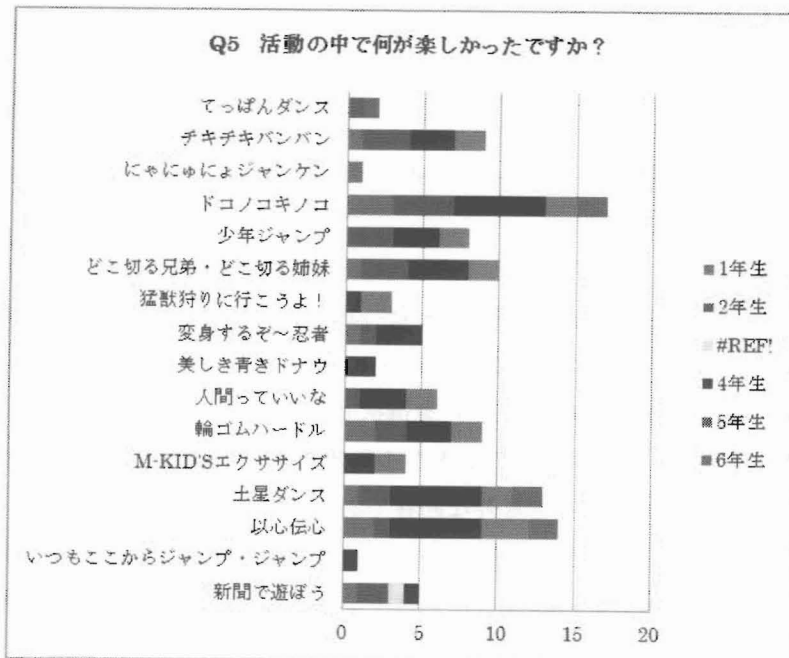


図7 アンケート調査の結果 (作図: 高橋 2011)

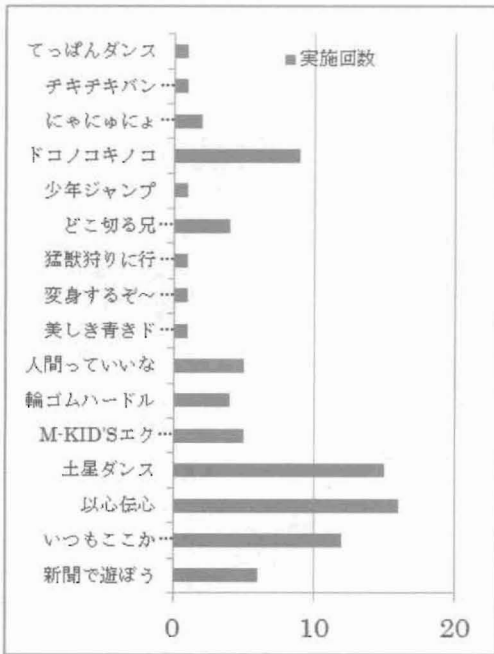


図7 教材の取り組み回数 (作図: 高橋 2011)



「未来ダンス」第8回 (写真: 宗彩乃彩乃)

6 おわりに

学生(おどスポ先生)の目的は、山間へき地の子どもたちとそこで行われている地域教育について知ることであった。そこで、観察したことや体験したことを、毎回スケッチブック2ページにビジュアルにまとめてもらい、活動終了後に製本することを提案した。半日の活動に加えて、さらに立ち止まって考える作業は、参加した学生にとって大きな負担であったと思われる。しかし、出来上がった40ページの冊子は、おどスポ先生が「未来ダンス」を通して学んだ証となった。冊子は西米良教育委員会を通して参加児童に届けられた。「未来ダンス」に対する温度差はあったが、学生はそれぞれに目的を達成したと言えるであろう。

舞踊学研究室の目的は、神楽を聞いて育った“米良ん子”が得意なことは何かを、神楽が日常にない子どもの運動や遊びとの比較から明らかにすることであった。しかし、活動の中で認められた参加児童の運動能力の高さやリズム感のよさ、そして「一礼あいさつ」の中学生の身のこなし等が、神楽の村で育ったこと関係があるのか、今年度の活動からは明らかにすることはできなかった。今後の課題としたい。

「未来ダンス」の発展として、次年度には、アートNPO法人と協力し、神楽の村でコンテンポラリー・ダンスの上演(出演者は児童と村民、他)を企画・実施したいと考えている。また、写真家の小河孝浩氏に公演の撮影を依頼し、西米良村と宮崎市でミニ写真展ができないかを構想中である。今年度は、その小河氏に、「未来ダンス」の第2回(9月24日)の撮影を依頼した。以下にその一部を紹介する。



Photo by 小河孝浩

非公開

非公開

非公開

非公開

引用・参考文献

- 1) 古川信夫（2011）発行に寄せて，未来ダンス，平成 22 年度宮崎大学教育文化学部共同県研究「みやざき学」報告書，舞踊学研究室（高橋るみ子）
- 2) 小河孝浩（2009）おかえり 西米良写真日記，石風社（福岡）から引用
- 3) 西米良村教育委員会（2011）TANJIRU（たんじる）
- 4) 宮崎県児湯郡西米良村ホームページ、<http://www.nishimera.jp/> 2011.3.1